

言葉で絵を描く詩人

福田知子

竹中郁（一九〇四・一九八二年）は、〈モダンニズム詩の旗手〉として安西冬衛、北川冬彦、北園克衛、春山行夫らと共に現代詩史に位置づけられている詩人である。

かつて竹中の通った兵庫県立第二神戸中学校（現在の兵庫県立兵庫高等学校）の同級生には、のちに画家になる小磯良平がいた。小磯との生涯にわたる友情のほかにも、児童詩画雑誌『きりん』を井上靖と共に主宰したり、具体美術協会や津高和一（抽象画家・『神戸詩人』同人）ら関西の現代美術家との交流など、アートとの関わりは多岐にわたっている。

郁の絵画への関心は中学時代から高かったようだ。郁は「小磯良平さんの横顔」（『画業五十年・小磯良平展』図録、一九七一年）というエッセイの中で、大原コレクション最初の公開の際に、二人して倉敷を訪れた際の印象と興奮を描いている。当時まだ珍しかった西洋絵画展の噂に、居てもたつてもいられなかったのだろう。二人は夜汽車で神戸を発った。

二人の中学生、小磯とわたくしとは冬の寒い朝、当時は寒駅の倉敷へ降り立った。とどころどころ雪が残っている中を、畦つたいに会場の小学校へ一番乗りをした（中略）わたくし達は盲滅法にみるだけで、どれがいいのか名作なのか、どれもこれも名作にみえるようだったが、小磯は『デバリエールの「室内」とゲランの「伊太利女」とがいいよと言った。その上、ゲランの絵の前では、あたりに人のいないのを見すまして、あり合わせの番人用の小椅子に乗り、ゲランの絵の下の方の隅を舌を出して舐めた。

舌で絵を舐めた真偽はともかく、やんちゃな中学生の鑑賞ぶりが目に浮かぶようで実には愉快である。この展覧会は、画家・児島虎次郎が大原美術館創始者・大原孫三郎からの依頼により、大正九年にパリで収集したモノの「睡蓮」、マチスの「画家の娘」など一八作家二七点の作品を、翌年二月十一日に神戸に入港した汽船で持ち帰ったものであった。会場には全国各地から鑑賞者が集まったらしい。中学時代の郁の友人には、小磯のほか田中忠雄（行動美術会員）がいて、三人で神戸の裏山で水彩画を楽しんでいたものだった。

郁は最初、画家を志したが父親に反対された。小磯があまりにも上手かったのも詩人の道を選んだ理由として考えられるが、「自伝」（『足立巻一評伝 竹中郁』理論社、一九八六年）には次のようにある。

父の頑固な忌避にあつて、それに代わるに、ひそかに現代詩を以てした。折しも、北原白秋、山田耕筰主宰の『詩と音楽』という雑誌が創刊され、作品を公募していた。たしかに7・8編の詩を送ったところ、大正一二年正月号に新進十一人集という特集があつて、その一人に選ばれた。これが私の一生を決定したといえる。

竹中郁の詩は、ときに文字で書かれた絵のように思える。特に初期作品にはくつきりと明るい視覚的イメージの定着が見られ、じつに鮮やかだ。

当時、芥川龍之介から賞賛の手紙をもらい、のちに西脇順三郎が「夢と現実とが混合しているのではなく化合している」と激賞され、杉山平一が郁の詩の中でも特に好きだったという、たとえばこの詩――。

くだものや
果物舗の娘が

桃色の息をはきかけては
せつせと鏡をみがいてゐる

澄んだ鏡の中からは

秋が静かに生まれてくる

〔「挽歌」『黄蜂と花粉』一九二六年〕

店先に並ぶ色とりどりのみずみずしい果物、娘の息づかい。息を吹きかけ鏡を磨くという一瞬の行為と、やがて生まれくる静かな秋の予兆。現実と非現実（夢）がまさに「化合」され、静かに拡がってゆく空間の波動。これら豊かな抒情をもって、鮮烈に定着させた永遠のきらめきの一瞬！

この詩には絵画よりも鮮やかに目に焼きつける言葉の力が漲っている。幼い頃より画家を目指したかった郁は、言葉で絵を描く（詩人）という道を選んだのだろう。



竹中郁・画